様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 3 月 31 日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2008 年～2009 年
課題番号：20790448
研究課題名（和文）ひきこもり支援グループの機能・構造と効果・回復に関する質的研究
研究課題名（英文）Qualitative research about group activities for people with social withdrawal.

研究代表者　吉田光爾（KOJI YOSHIDA）
国立精神・神経センター 精神保健研究所
社会復帰相談部 援助技術研究室長
研究者番号：30392450

研究成果の概要（和文）：
本研究は、いわゆる「ひきこもり」に対するグループ支援を質的研究を用いて分析し、支援プロセスの構造や機能・効果を明らかにすることを目的とする。平成20年8月～平成21年2月までの間に実際のグループの支援者にインタビューを行い、グラウンデッド･セオリー･アプローチを用いて質的に分析を行った。結果、7つのカテゴリーと45のサブカテゴリーを抽出し、これを用いてグループ支援のプロセスと機能・効果について記述した。

研究成果の概要（英文）：
This study aimed to clarify structure, function, and effect of group support activities for people with social withdrawal by using qualitative research method. This study interviewed support staff of group activities from August 2008 to February 2010. And analyzing interview data with Grounded Theory Approach, we extracted 7 conceptual category and 45 sub category to describe group support activities.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成 21 年度	1,000,000 円	300,000 円	1,300,000 円
平成 22 年度	1,000,000 円	300,000 円	1,300,000 円
年度			
年度			
年度			
総　計	2,000,000 円	600,000 円	2,600,000 円

研究分野：青年期精神医学
科研費の分科・細目：社会医学 公衆衛生学・健康科学
キーワード：医療・福祉　ひきこもり 青年期精神医学 地域保健

１．研究開始当初の背景

ひきこもり支援においては、本人と社会の間の中間領域として「フリースペース」「居場所」や「デイケア活動」などを設定することが、支援のアプローチの一つとして有効であろうことが、各種の実践活動や、筆者も作成に携わった「ひきこもりガイドライン」で示されている（伊藤ら,2003）。

しかし、ひきこもりのグループ活動について、その支援の方法論や効果は経験的に語られているに過ぎず、どのような支援が有効なのか、グループが果たしている機能について、コンセンサスをまとめた研究はない。質の高いひきこもり支援を拡充していくためには、ひきこもりのグループ支援のプロセスについて記述をおこない、その知識を共有化する

ことが重要であると考えられる。
　また同時に支援をした結果、どのような効果が得られるのかについて、も十分な知見が存在しない。共通性のある支援の効果について知見を集約することは、支援者が一定の方向性や見立てをもって支援を行う上で重要であると考えられる。

２．研究の目的
　本研究では、既にひきこもりのグループ活動を展開している支援団体の支援者に、グループ活動によるひきこもり支援の構造・機能と、およびグループ活動によってもたらされる効果・回復について、インタビューを行い、グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて質的に分析し、共通項を抽出する。その記述をもって、一定のスタンダード作りの基盤とすることを目指すものである。

３．研究の方法
(1)対象
　研究の対象は、全国各地でひきこもり支援を行っている支援者である。事業所に赴き、インタビュー調査を行った。
　グラウンデッド・セオリーの手法を用いた場合、データ収集の終了は理論的飽和化に達したときであるが、本研究では 5 施設 12 名の支援者に調査を行った。なお原則的に個別面接を行ったが。場合によってはグループインタビューの形式をとった。なお、対象者ｈグラウンデッド・セオリーアプローチに基づき、理論生成に必要と思われる対象を随時追加して調査していった。結果、主として 3 年以上支援実績のある精神保健福祉センター(2 ヶ所)・民間のＮＰＯ法人等の活動(3 ヶ所)について、従事経験が１年以上などの一定年数を経たスタッフに調査を行うこととなった。

(2)研究方法
　１時間程度の半構造化個別インタビューを行った。面接は、オープンな雰囲気で対象者支援者が他者の目を意識することなく主観的意見を述べられるよう、調査者の所属する支援機関あるいは対象者が希望する場所へ赴いて行った。面接に当たっては質問項目や具体的な質問文、進行上の指針などをリストアップしたインタビュー・ガイドをあらかじめ用意した。インタビュー・ガイドは会話が行き詰まったり、非生産的な話題に陥ったとき新しい展開のための土台として用いた。
　参加者の同意のもと IC レコーダーに録音されたインタビューを文字化、その後コーディングを行い、複数のインタビュー内容をカテゴリ化し共通性を見出しながら理論抽出していった。
(3)対象者への倫理的な配慮
　本研究では、ひきこもり支援グループの支援員が対象としたが、インタビューに際しては本研究の目的、手順、拒否権、調査を拒否しても不利益にはならない点について説明書に記し、調査者から説明するとともに、本人の同意書への記入をもって同意とした。

４．研究成果
　結果、45 のサブカテゴリーと 7 つのカテゴリーが生成された。これらの概念とカテゴリーを比較検討し、カテゴリーとストーリーラインの結果図を作成した（図 1）。
　以下、得られたカテゴリーを用いながら、支援の機能・効果について、ストーリーラインを示す。また、ストーリーラインの提示後、カテゴリーを構成する個別のサブカテゴリーの概念について説明する。なお、サブカテゴリー名称後の数字はサブカテゴリー番号である。

(1)ストーリーライン
　利用者はまず『エントリー』をされるが、初期の利用者は『葛藤・困難を抱えた存在』である。かれらは『グループの内容』の活動を行うことを通じて、『グループの機能』によって変化していくが、他方で『葛藤の再体験』によって悩みや苦悩に直面化する。これに対して『スタッフの側方的な支援』によって、これらのグループの正の機能が促進されると共に、利用者が抱える葛藤が対処されていく。他方で、こうしたグループをより円滑に機能させるために『他の支援構造の用意』がされる。このような場に支えられながら利用者は変化していき『利用者の回復』がなされていく。

(2)各カテゴリーの説明
①カテゴリー1『エントリー』
　利用者をグループに導入する場合には、利用希望者やグループ活動が適していると考えられる対象者に≪誘いかけ・関係作り:1≫を行った上で≪事前のアセスメント:2≫を行い、≪グループ活動への参加可能性:3≫、および≪緊急の精神医学的処置の必要性のアセスメント:4≫を行う。ただし、このエントリーの際には、利用者にとって精神医学的な≪ラベリングのない導入:5≫が参加の敷居を下げるために重要である。
②カテゴリー2『困難を抱えた存在』
　利用者は初期の段階には概ね以下のような状態にある。すなわち≪乏しい対人スキル・関係:6≫状態にあり、自分を否定するかもしれない≪他者と世界に対する不信感:7≫をもっている。また、他者との関わりが乏しいため、他者を鏡として得られるはずの≪自己理解の乏しさ:8≫も見受けられる。また、ひきこもっていることから≪乏しい生活の

経験・楽しみ:9≫という困難を抱えており、この経験の少なさは同時に仕事や対人関係、生き方に関して≪狭い価値観:10≫でとらえるという状況につながっている。それと同時に、こうした経験の少なさは具体性が乏しいがゆえに強い≪漠然とした不安感:11≫に繋がっている。また、こうした経験の乏しさや困難から、本人の≪低い自尊感情・自己効力感:12≫が生まれており、それを土台として≪本人の主体性の阻害:13≫がうまれている。

なお、これらの困難は単独・単線的につながっているのではなく、相互に影響し合って、本人の困難として立ち現れる。

③カテゴリー3『グループの内容』

この点に関してはグループが置かれている環境、活用できる資材によって差があり、全てのグループに共通性は必ずしも見いだせなかったが、概ね≪レクリエーション:14≫によって本人の活動性や興味を高めると共に、≪軽作業:15≫やエンカウンターグループなどの≪心理プログラム:16≫を準備し自己省察や対人スキルの伸張がはかられる。ただし、そのような構造化された時間だけでなく、≪居場所:17≫としての時間も用意されていることが多い。

④カテゴリー4『グループが果たす機能』

グループでは利用者が初期の困難状態に対して、以下のような機能を果たす。まず利用者同士の≪対人関係の学び:18≫の場が与えられ、これまで乏しかったり、挫折した経験がある対人関係を徐々に練習することになる。この経験の中で少しずつではあるが他者と世界に対する≪信頼の獲得:19≫が行われる。また、そのような他者を鏡とする対人関係を通じて≪自己理解の促進:20≫がなされる。

他方でグループは様々なプログラムやレクリエーションを提供することによって、≪楽しみ・喜びの発見・経験:21≫の機会を利用者に提供していく。こうした多様な経験や人間関係を通じて、仕事や生き方、対人関係について≪多様な価値観の醸成:22≫がもたらされていく。また、他の利用者やスタッフとの関わりの中で≪回復のモデル・希望の見いだし:23≫が経験され、自分が望む将来の姿や、希望が発見される。また≪仲間からの共感・助言・励まし:24≫を受けると共に、自分自身も時に先輩や相談者として≪他者を助ける経験:25≫を得ることもある。こうした対人関係やその他の成功体験を少しずつ積み重ねることによって≪経験に基づく自尊感情の高まり:26≫が生まれ、このような中で≪主体性の回復:27≫が果たされていく。なお、後に述べるが、外部へのチャレンジを行い、悩んだり、失敗した際に≪戻れる安全な基地:28≫としても機能する。

⑤カテゴリー5『葛藤の再体験』

しかし、グループはそのような正の効果だけを生むのではない。利用者は対人関係やその他経験の中で≪失敗や挫折・万能感の喪失:29≫を繰り返すこともある。また、自己理解が進んだり問題へ直面化することによる≪具体的な不安・悩みの出現:30≫にも見舞われる。

⑥カテゴリー6『スタッフの側方的な支援』

スタッフは、このようなグループに関して側方的に関わる。すなわち、まず導入の初期には利用者にとって≪安心できる存在:31≫としてあらわれ、緊張や不安が高い利用者に寄り添う。他方で、徐々に利用者と利用者を≪つなぐ役割:32≫をとり、対人関係をふくらませていく。またレクリエーションや活動を率先して≪自分自身が楽しむ:33≫ことにより、グループの活動を賦活させる。また、それぞれのスタッフが個性を活かしながら活動することによって、対人関係や生き方についての具体的な≪モデルとなる:34≫機能を利用者に対して果たすことになる。また、利用者が希望していることや、チャレンジしようとしていることに関して≪背中を押す:35≫役割も果たす。他方で、利用者が経験する≪失敗や挫折のフォロー:36≫を行い、≪<具体的な悩み・不安への対処・相談:37≫に応じることにより、利用者の葛藤や不安を支える役割もとる。これらの役割を果たすためにミーティングなどを通じ≪スタッフ同士の支え合い:38≫の場を用意することも重要である。

⑦カテゴリー7『他の支援構造の用意』

しかし、ひきこもりのグループは万能ではない。グループは≪ラベリングのない導入≫が行われている場所も多く、場の定義や目的が曖昧であったりする。そのため、他の支援構造を用意し、≪就労・教育を主眼としたプログラム:39≫を準備する場合や、個人的な悩み等やグループ内での体験をとらえ直すために≪個別の面接場面:40≫が用意される場合もある。≪医療支援:41≫も同様に準備される場合がある。ひきこもりグループは単独でその本人の回復に機能するのではなく、これらの取り組みとの相補的な関係でより有効に機能する。

⑧カテゴリー8『利用者の回復』

上記の過程を通じ、対象者は回復していく。回復の中で得られるのはグループ内あるいは外での≪対人関係の構築：42≫である。また、利用者の自己理解が進むことにより、自己の生き方について≪自己受容・覚悟:43≫がすすまり、また≪自己表現:44≫が可能に

なっていく。その結果として、自己の能力や希望を考慮しながら、就労をするものや、障害サービス等を利用していくなどの形で社会参加していく等≪個々に応じたライフスタイルの構築:45≫をしていく。
　ただし、この回復は単線的におこるのではなく、チャレンジや試行錯誤が繰り返し行われるのであり、グループは≪安全な基地:28≫として機能している。

(3)考察
　本研究では、ひきこもりの本人に対して提供されるグループについて、その果たしている機能や、スタッフの役割について、エントリーから回復に至るまでのプロセスを説明した。ひきこもりという状況下で多数の困難を抱えていた利用者が、グループの中で多様な経験をすることで自己省察や新たな経験を獲得していくとともに、それをスタッフが直接と言うよりも支持的にささえている様子が、支援スタッフの中から浮かび上がってきたと言える。今回の研究では本人の初期の状態から、具体的にもたらされる効果について記述できたことにより、他の支援者が実際の関わりをもっていく際に、方法論のモデルとして活用できると考えられる。
　ただし、本研究の応用可能性には一定の限界がある。本研究で扱った「ひきこもり本人へのグループ活動」は、本人が参加するうえで「ラベリングのない導入」がなされているように、「就労や教育などを達成する」という目的・構造は必ずしも明確にしていないグループが多かった。この点は、就労等グループの目的が明確な活動について分析が行われていないことを意味し、データの応用範囲に限界が存在することを意味している。
　とはいえ、この「ラベリングのない導入」を行いうるグループの性格の曖昧さは、ひきこもりへの支援として本質的な性格をもつ、と支援者からは語られていたことは注目に値する。すなわちひきこもりの青年は、必ずしも「精神科医療」や「就労リハビリ」にコミットする存在として自己を定義していないのであり、その自己定義の曖昧さゆえに、コミットすべき行き場を失っているのである。そのような彼らに対して、「ラベリングのない導入」をおこないうる、あえて曖昧な支援環境が存在すること重要なのである。
　しかし、そのような曖昧さやモラトリアム性を担保するがゆえに、ひきこもりのグループ支援は万能ではないことも事実である。逆に本研究では、グループ支援は単独では必ずしも成立せず、個別の面接や、精神科医療などむしろ他の支援構造との関係の中でより有効に機能することも明らかになったことは一定の意義があると考えられる。
　本研究では一定の理論的飽和を得たと考えるが事例数の集積には未だに余地もあると考えられる。このため生成された理論を基盤に、さらなる継続的な研究を行っていく必要もあると考えられる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計０件）
〔学会発表〕（計０件）
〔図書〕（計０件）
〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等
特になし

６．研究組織
(1)研究代表者
吉田 光爾（KOJI YOSHIDA）
国立精神・神経センター精神保健研究所
社会復帰相談部 援助技術研究室
研究者番号：30392450

(2)研究分担者
特になし

(3)連携研究者
特になし
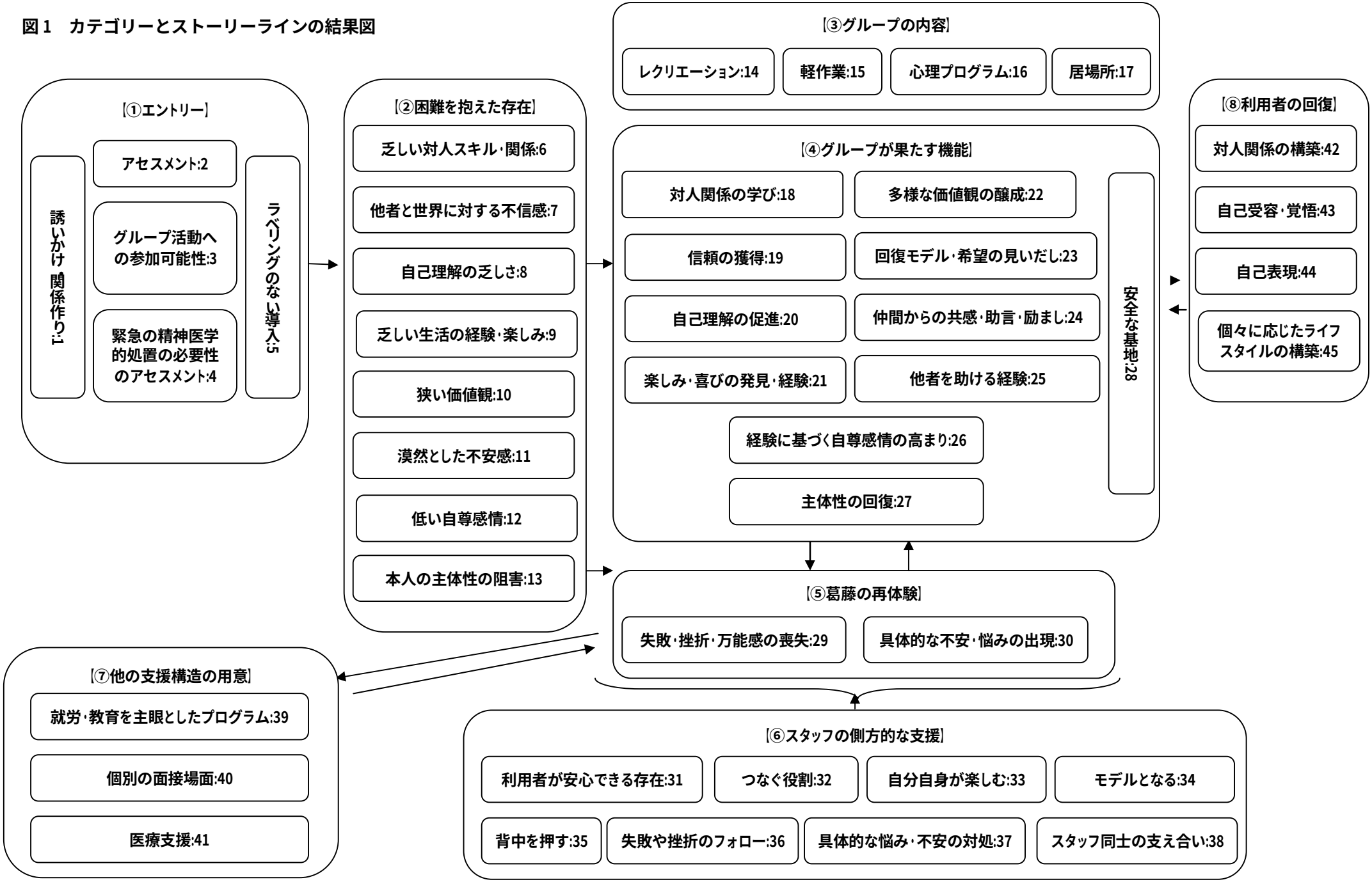
図１　カテゴリーとストーリーラインの結果図